
陸士訓練学校のドタバタな日常

ラモン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

陸士訓練学校のドタバタな日常

【Nコード】

N5850X

【作者名】

ラモン

【あらすじ】

管理局の魔導師を目指す少年少女たちが集う、第4陸士訓練校。これはその訓練校の日常を描いた、ドタバタ学園コメディである。基本的に「こまけえことはいいんだよ！」の精神でお読みくださいませ。

皆様の暇つぶしにどうぞ。

第1話 『朝8時だよ！ 全員集合！』（前書き）

いよいよ始まりました、コラボ小説『陸士訓練学校のドタバタな日常』。

他作者さんのキャラクターが沢山出演していますので、その全員を魅力的に書けるかどうか心配ですが、全力でやってみたいと思います。

では、『陸士訓練学校のドタバタな日常』が始まります。

第1話 『朝8時だよ！ 全員集合！』

時空管理局が運営する第4陸士訓練校。

この陸士訓練校は、様々な意味で数ある訓練校の中でも名の知れた訓練校だった。

様々な意味で、というのは文字通り良い意味も悪い意味も含んでいる。

良い意味は、数多くの優秀な陸士たちを輩出していること。

講師陣に未だ現役で最前線に出ている、歴戦の管理局員が居ること。

総じて訓練校とは思えないレベルの人間が揃っていること。

これだけ聞けば、さぞかし優秀な訓練校なのだと思うだろう。

しかし、この第4訓練校の管理局内での評判は、実はそれほど良くはなかったりする。

何故か。

それは まあ、これから語るこの第4陸士訓練校の日常を見ていただければ分かることだろう。

陸士訓練学校のドタバタな日常
第1話 『朝8時だよ！ 全員集合！』

「やっぱ時代は“けいおん！”だと思っわけよ。

正直音楽とか全くわからん俺だが、とりあえず漣たんと同じベース買った。

目指せ武道館ライブ！！むしろ世界進出！」

訓練校のとある教室の中央で、短めの金髪を揺らす少年　ハヤト
ト「ロックウエルが新品のベースを持ち、得意げな顔をしてポーズをとっていた。

ただし持ち方は完璧に間違っていたりするけれど。

「放送終了と共にネットオクに出品されてる未来が見えるぞ。それとお前右利きじゃん。

つーか、お前先々週まで「時代はハチワンダイバー」とか言っって、将棋やってたじゃねーか」

そんなハヤトを見て溜息を吐くのは、ハヤトと同じ金色のくせっ毛を持った少年、ルーク「リーゼンベルグだ。間違った持ち方のままポーズを決めるハヤトを見ようとせぜ、手元で広げた漫画に視線を落としたままルークは言葉を続ける。

「先月あたりは「時代はARIA」とか言ってゴンドラ漕ぐ練習してたし、その前は「時代はバンブーブレイド」って剣道やってたし、もうオチが見え見えすぎて泣けてくるわ」

「いや、今度は本気だ！ やつと気づいたんだよ、俺は澪さんの生まれ変わりだつて！」

「死んでねーし、いやそもそも生きてねーし、お前男だし」

「ふざくんな！ 澪さんはいつでも生きてるんだよ！ 俺の胸の中で！..」

「末期的な会話すんじゃないよ。あと“けいおん！”ならあずにゃんだろ」

「ちっばいに用はない！」

「おっばいに貴賤はない、ただそこにおっばいという概念があるだけ。」

その程度の事にも気づけんとは情けない、いい加減目を覚ましたらどうだハヤト？」

「大きい正義！ 貴様こそ目を覚ませルーク！」

何故か芝居がかった口調でぎゃーぎゃー言い合うハヤトとルーク。そんな2人の言い合いを遠くから眺めつつ、オレンジと紫のオッドアイを持った少女が、セミロングの黒髪を揺らして溜息と共に小さく呟く。

「……あやつらは何をしょーもない会話をしとるんじゃ、朝も早いというに」

やや年寄り臭い口調で呟いた少女の名は、高町ゆず。

自分の机に肘を突いてハヤトとルークのやり合いを眺める姿は、やや年寄り臭い口調も相まって本来の年齢よりも年上のような印象を受ける。

「知らないわよ。3馬鹿のスケベ共の会話なんて」

「ティア、それは酷いよ……まあ、あたしもそう思っけど」

呆れ返った表情をするゆずの言葉を受けて溜息と苦笑をもらすのは、橙色のツインテールが特徴的な少女　ティアナⅡランスターと、青いショートカットの活発そうな少女、スバルⅡナカジマの2人。

そんな3人の視線の先で、ハヤトとルークの議論は白熱していく。もちろん、果てしなくしょーもない方向に。

「なんでちっばいを否定する!?　これでは、ちっばいの需要が減ってエロゲが少なくなる!」

エロの冬が来るぞ!」

「ちっばいを肯定する者は胸ならば何でもいいとしか考えていない、

だから抹殺すると宣言した！」

「エロがエロに罰を与えるなどと……！」

「私、ハヤト」ロックウエルが肅清しようというのだ、ルーク……！」

「エゴだよそれは……！」

「むしろエロじゃね？」

「誰がうまいこと言えと」

間違った方向に熱くなる2人のボルテージが最高潮に達した頃、見計らったようなタイミングでハヤト達の教室の扉が開き、短く揃えられたブラチナブロンドを揺らす少年が入ってきた。

少年の存在に気づいたティアナ達は笑みを浮かべ、彼の名前を呼びながら手を振る。

「リオス、おっはよう！」

「おはようなのじゃリオス」

「おはよ、今日は遅かったわね」

「あ、うん。おはよう、スバル、ゆず、ティアナ」

名前を呼ばれた少年　　リオス「コーネルドは、誰もが見とれる

ような柔らかな微笑みを浮かべ、それから自分の登場にも気付かず、いまだに言い合いを続けているハヤトとルークへと視線を移しながらティアナ達の隣になる自分の席へと腰を下ろした。

そして視線をハヤトとルークに固定したまま、ティアナ達に向かって短く尋ねる。

「……また？」

「また、よ。朝っぱらから元気よね」

「ほんにのう。もう少し静かにしてもバチは当たらんじやろくに」

「あはは。まあ、あたしは元気でいいなって思っけど」

ティアナとゆずが揃って嘆息し、スバルは苦笑いを返す。

「ほれリオス、はよう止めてくるのじゃ。あやつらの後始末はお主の役目じゃろ」

「ゆずの僕に対する認識は甚だ遺憾だけど、否定できないのが悔しい……」

「遺憾とかはどうでもよい、はよう止めてきやれ」

「ううう……なんで幼馴染ってだけで僕が……」

「宿命と書いてさだめ、というヤツじゃな。なに、ちょっと行って

止めるだけじゃろ？

何も姉上と戦って勝てと言ってる訳でもなし、男ならささつと行くのじゃ。ほれほれ」

追い払うようなゆずの手つきに促され、リオスはガツクリと肩を落とし、トボトボと重い足取りでルークとハヤトの方へと近づいていく。けれど2人は既に周りの事など気にならない程にヒートアップしているらしく、真横までやってきたリオスに気付く気配は無い。

「ねえ、2人とも」

「そうか……！ しかしその希少価値をもったちっぱいが、ロリコンを生み出すんだ！

それを分かるんだよルークッ……！」

「分かってるよ！ だから、世界にロリコンの心の光を見せなければならぬんだろ！」

「ねえってば、ハヤト、ルークも」

言葉だけでは気付いて貰えないと悟り、ハヤトとルークの服を引っ張ったりするリオスだが、それでも2人は気付かない。ここまできるとわざと無視しているのかと思う程なのだが、実際はただ単にヒートアップしすぎて本気で気付いていないだけだったりする。

「ちっぱいは！ 人間のエロ全部を飲み込めやしない！」

「おい」

「ちっぱいの良さはそんなもんだって、乗り越えられる!!」

「もしもし」

「ならば、今すぐロリコン共すべてに叡智を授けてみせる!」

「ルークさん、ハヤトさん」

「お前をやってから、そうさせてもらうつ!!」

「……駄目そうんだけど」

何度声を掛けても気付かぬ2人に、諦めた表情を浮かべて助けを求めるようにティアナ達を振り返るリオス。しかし、返ってきたのは無常な言葉だけだった。

「頑張れ」

「頑張きなさい」

「頑張るのじゃ」

「酷いよ3人とも……」

ニコニコと満面の笑みで手を振る3人に悪態を吐いてから、もう一度ハヤトとルークの方に向き直る。

どう頑張っても、こうなった2人を止められる筈がないと長年の付き合いで分かっているのだが、ハヤト達を止めるように言われた手前、無理とわかっていてもやらないと後が怖い。

ハヤトとルークだけが馬鹿騒ぎをしても、何故か最終的には幼馴染の自分まで一緒にたに説教されてしまうのだから。

「……よし」

諦めから一転、覚悟を決めたと小さくガッツポーズをして、リオスはもう一度ハヤト達に声をかけようと口を開こうとした……が。

「朝っぱらから何を大声出してるのかしらね、アンタ達は」

「あいだっ!？」

「ぎゃふっ!？」

それよりも先に、いつの間にか教室の中に入ってきていた濃いブラウンのセミロングを揺らす女性が、手に持っていた黒い名簿でハヤトとルークの頭を思い切り引つ叩いた。

スパーン! という小気味良い音とハヤト達の悲鳴が教室に響き、その音の大きさに驚いたリオスは口から出そうとしていた言葉を飲み込んだ。

「うっおおお……」

「いつてええ……」

「全くこれだからあんた達くらいの男は嫌なのよね。ほらほら、そんなところで痛がってないで、教室の隅っこにでも行つてくれない？ 朝から私のテンション下がっちゃうでしょ」

叩かれたハヤトとルークに冷たい視線を送りつつ、うえうえと舌を出す女性。

この女性の名前は左^{ひだり}舞^{まい}。第4訓練校の教官を務める1人であり、ハヤト達の担任でもある女性だ。付き合いやすい人柄で、訓練生からは人気がある。

ただ、ハヤトとルークの2人からの評判だけはすこぶる悪いのであった。

「おはようございます、左教官」

「はい、おはようリオス。その馬鹿2人の面倒、ちゃんとやってよね。幼馴染なんだし」

「幼馴染だからって面倒をみる必要は……いえ、わかりました」

ひらひらと手を振る舞の主張に反論しようとして、リオスはそのままと諦めたように溜息を吐く。

このあたりは、子供の頃からハヤトとルークの幼馴染として育つ

てきたリオスにしかわからない、一種の諦めというものだろうか。

「ほら2人とも、いつまでも大げさに痛がってないで席に戻ろうよ」

「痛がつてんじゃねーよ、ガチでいてーんだよ。手加減しねえとか
どいう了見だ、あの不良教官」

「まったくだぜ。あの教官、馬鹿力で遠慮なくぶん殴りやがって」

「2人ともそんなこと言っちゃだめだよ。教官に聞こえたら怒られるよ？」

「残念ながら聞こえちゃってるよ馬鹿。そんな酷いこと言われると、舞さん悲しくって思わずアンタ等の内申を最低値にしちゃうかもしれないー。そしたら進級はどう頑張っても絶望的かなー。

私としても本意じゃないけど、シヨックで思わずだから仕方ないよねー」

「横暴だ！ 権力の無駄遣いだ！」

「弱みを握って脅すなんて教官のすることじゃねーぞ！」

「ば、僕は関係ないじゃないですか！」

「をほほほほ！ お黙りむさ苦しい男子め！ くやしかったら美少女に生まれ変わってきなさい！」

そして、アンタ達の進級は私の指先ひとつに掛かってるってことを覚えておくのね！」

リオスの言葉に跳ね起きるように立ち上がり、猛然と舞に向かって抗議するハヤトとルーク。

しかし舞は2人の抗議など知らぬふりで、胸を張って高笑いを響かせるだけ。本来ならもう少し騒ぎになりそうなのだが、リオスやティアナを始めとした教室にいる訓練生にとって、毎朝のように行われるハヤトとルーク、そして担当教官である舞のこのやり取りは既に恒例行事。

今更あーだこーだと騒ぐのも馬鹿らしいというものだ。

「ルークがむさ苦しいのは認める！　だが俺はイケメンだろう！」

「ハヤトがむさ苦しいのは認める！　だが俺はイケメンだろう！」

「何で2人とも同時に同じ内容の事を、一字一句違わずに言えるの？　僕はそっちの方に驚きだよ」

「まあどっちも性格が壊滅的だから、どんだけ顔が悪くても意味無いのが悲しいところよね。」

どのみち私はアンタ達くらいの男は嫌いだから、顔が悪くても関係ないけどね。

やっぱ弄るなら女の子がいいわよね。柔らかいし可愛いし……あ、そういう意味じゃリオスは合格だから安心なさい。男にしろくのがもったいない位に可愛いもの！」

「嬉しくないです」

目を爛々と輝かせて、まるで女神のような笑みを浮かべる舞に対

し、リオスは片手を挙げて疲れた声を上げる。とはいえ、これもこの訓練校に入ってから毎日のことだったので、既に諦めが入っているのが涙を誘うところだ。

「差別は駄目でしょ教官！」

「そーだそーだ！ 俺等にはいつでも厳しくせに、なんでリオスには妙に優しいんだよ！」

「女の子>リオス>>>>（越えられない壁）>>>>あんた達」

「「すいませんでした……」」

「わかればよろしい」

きつぱりと言い放つ舞に、ハヤトとルークが膝から崩れ落ちる。これもまた、このクラスでは余りにも見慣れた光景であった。…うん、まあこれを見慣れるのもどうなんだという気持ちは大いにあるのだけど、見慣れた光景なのだから仕方ない。

「左教官は、あいも変わらず面白い人じゃなあ」

「アレを面白いで片付けていいわけ？」

「そういう事しておいた方が、わらわ達の精神衛生にとって健全じゃろ？」

「まあ……そりゃ、そうよね」

その光景を見ながらニヤリと笑うゆずを横目に、ティアナはやれやれと頷いた。

見ている分には面白いが、あそこに自分から突っ込んでいこうと思えるほど、ティアナは冒険心を持った若者ではない。むしろ危険からは遠ざかるべきだと考える人間だ。

わざわざトラブルに関わろうと思わないのは当然だろう。

「ま、いざとなった誰かが止めるでしょ」

「そうじゃな。わらわ達は、ここでこうして高みの見物といこうかや」

ただ、ゆずとティアナの隣で自分の席に座っているスバルだけは、心配そうな顔をする。

それはお約束となりつつあるこの後の展開について、彼女なりに心配しているからだろう。

「うーん、本当に止めなくていいの？」

多分、舞さんとハヤト達、また校長センセに怒られちゃうよ?」

「じゃあアンタが止めにいつてきなさいよ、スバル」

「そうじゃな。少なくともわらは教官に絡まれるのは御免じやもの」

「う……そ、そりゃあ、あたしだって嫌だけどさあ」

けれどゆずとティアナの声を受け、スバルは口を尖らせて言葉に詰まる。

心配は心配だが、馬鹿騒ぎに絡んだせいで朝から酷い目にあうのは勘弁願いたいらしい。

正しく懸命な判断だと言えるだろう。

「あの騒ぎはいつものことなんじゃし、放っておくのがよかる。わらわ達に出来るのは、こうして騒ぎを眺めながらのんびりしておくことなのじゃ」

「そ、そうかなあ」

「当然じゃろ。そも、アレはじゃれておるようなものじゃよ。左教官がその気になったなら、ハヤト達なんぞ一発で気絶させられとるしの。何せ格闘戦においては、主よりも遥かに強いんじゃし」

「確かに、それはそうなんだけどさ」

「心配せんでも、怒られるのも含めていつも通りということじゃ。そんなにやきもきせずに、この光景を楽しむくらいの余裕を見せんといかんのじゃ」

「……」

「それに　む？　どうかしたかの？」

ぽやんとした微笑を浮かべるゆずだったが、自分の方をまじまじと見つめるスバルの視線に、言葉を途中で止めて怪訝な顔で首を傾げ、スバルに向かってそう問いかけた。

問いかけられたスバルは「んー」と小さく唸ってから、感心したように呟く。

「やっぱりゆずって落ち着いてるよね。なんかおばあちゃんみたい」

「おば……っ!？」

「ばっ! 何言ってるのよ馬鹿スバル!！」

「もがっ」

不穏な発言をしたスバルの口をティアナが慌てて塞ぐ。

ただ、スバルはもう『その単語』を口にしてしまった後なので、既に手遅れではあったが。

「お、おばあちゃん……わらわがおばあちゃんじゃと……?」

「この馬鹿! そう言われるのをゆずが気にしてるって知ってるでしょ!？」

「あわわ、そういえばそうだった! ど、どうしようティア!？」

「ふ、ふふふ……まだ16年しか生きておらんというに、まさかおばあちゃん扱いされるとはの。」

さすがのわらわも吃驚仰天じゃよ。まさに青天の霹靂というヤツじゃ」

ゆずは椅子に座ったまま俯き、プルプルと肩を震わせてぶつぶつと呪詛のように何事かを呟いている。

おばあちゃん呼ばわりされたのが、余程ショックだったのだろう。まあ、普通女の子なら誰でもおばあちゃん呼ばわりされればショックだけでも。

ただ、ゆずは殊更「おばあちゃん」呼ばわりされるのを嫌がつており、それはこのクラスの間人間なら誰でも知っていることなのだ。それはもちろんスバルも知っている……筈のだが、彼女は時々こうしてそれを忘れ、うっかり彼女をおばあちゃんっぽいと言ってしまう事があるのだ。それこそ今回のように。

「吃驚仰天とか、そういう言い回しもおばあちゃんっぽいよね」

「なん……じゃと……!？」

「だから何でアンタはそういう不穏当な発言をするのよ、この天然馬鹿!」

「ひゃあ!? し、しまった! つい口が!」

注意されたばかりなのに、更にうっかり発言を重ねるスバル。

ティアナに思い切り頭を引っ叩かれるが、もうどう頑張っても時既に遅し……というかぶつちぎって遅すぎるというか、何というか。

「う、うう……」

「だ、大丈夫よゆず！ ちょっと単語の選び方が古くさ……新しくないだけで！」

「そうそう！ 物腰とか喋り方が年寄りくさ……大人っぽいだけだから！」

ぶるぶると肩を震わせるゆずの目に、涙が溜まっていく。

ティアナとスバルは何とか慰めようとするものの、慌てているせいか結局傷口に粗塩とからしを塗りこむような単語しか選べていない。やめて！ もうゆずのライフはとくにゼロよ！！

そして

「わらわは……わらわは……っ！ まだピッチピチの16歳じゃもん……っつー！！」

「あ、ゆず。ピチピチっていうの、もう死語だよ」

「あんたはもう喋るな！」

「うわ………んっー！！」

ガタンッ！ と席を立って涙目のまま教室の外へと駆け出していくゆず。

その背中にスバルがまたまたうつかり発言を投げかけ、ゆずは走る速度を一気にトップギアに入れ、目にも留まらぬスピードで廊下を駆け抜けていってしまふのだった。

「ゆ、ゆずーっ！」

「ごめんゆず！ 謝るから戻ってきてーっ！」

ゆずが走り去った廊下に、ティアナとスバルの声だけが空しく響き渡る。

ティアナとスバルが慌てて廊下に顔を出したが、そこにゆずの姿はもう無かった。

一方その頃のハヤト達と言えば。

「さあどうするのかしら！？ 私に内申という切り札を握られてい
る以上、アンタ達に逆転する要素は無いわよ！ さっさと降参して、
私の視界に入らない教室の隅でガタガタ震えてなさい！」

「……ごちゃごちゃうつせー。ンなこたもうどうだっていいんだよ」

「あら？ 諦めたのかしら？」

「いいぜ……教官が俺達の内申を思い通りに出来るってんなら」

「まずはその幻想をぶち殺す!!」

「いや、ハヤトもルークもそんな権限ないよね？」

そげぶごっこで遊んでいました。

この後、舞とハヤト、ルーク、リオスの4人は漏れなく校長からのありがたいお説教をいただき、ゆずは訓練校を一周してからすつきりした顔で戻ってきたとき。めでたしめでたし。

さて、ここまで読んだ諸君に、は第4陸士訓練校の評判が思わしくない理由を理解して頂けたと思う。

優秀な人材を輩出し、教官に歴戦の管理局員を向かえ、レベルの高い人間が揃っているというのに、第4陸士訓練校が管理局内であり評判がよろしくない理由。

それは。

総じて、そこに関わる人間のキャラが濃いせいである。どっとはらい。

・今回のおまけ

『ハヤトとリオス』

ハ「……なあ」

リ「何？」

ハ「巨乳の定義って、やっぱりDカップから」

リ「いいから反省文書きなよ」

『リオスとルーク』

ル「なあ、リオス」

リ「何？」

ル「黒縁眼鏡と三つ編みをした真面目っ子がガーターベルト着用っ

て、かなりエロくね？」

り「だから反省文書きなつて」

『舞とゆず』

舞「ねえ、ゆずちゃん」

ゆ「なんですか、教官？」

舞「私ってね、ポニテ萌えなんだ。だから」

ゆ「仕事してください」

第1話 『朝8時だよ！ 全員集合！』（後書き）

初めましての方は初めまして。

私の作品を読んでくださった事がある人は、また読んでくださりありがとうございます。

どうも、ラモンです。

そんなこんなで、いよいよ始まっちゃいました。

今まで他作者さんのキャラを、しかもこんなに大勢動かした経験がないので、凄くドキドキしながら書かせてもらいました。

結構色々やらかしちゃった気もしますが、大丈夫だったんでしょうか（汗）

今回登場したキャラクターの作者さん、問題があつたらメッセージなどで教えてくださいませ。修正させていただきますので。

ともあれ、これからこんな感じで『陸士訓練学校のドタバタな日常』は続いていく……筈です。

果たして私はどこまで頑張れるのでしょうか。

出来る範囲で、全力で頑張っていきたいと思います。

ちなみに『今回のおまけ』ですが、これは今まで登場したキャラクターが4コマみたいな感じで喋りあうものです。

ネタが思い浮かぶ限り毎話やるつもりですので、こちらもお楽しみに。

それではまた、次の話で。

第2話 『彼等は基本的にノリで生きています』

第4陸士訓練校。

ここでは日夜厳しい訓練と、一流大学も真つ青な座学を教えている。

もちろんそこに在籍している生徒達は、その全員が自分に厳しい人間達だ。

これは、そんな第4陸士訓練学校の厳しくも楽しい日常を描いた物語である。

「……」

「……」

早朝、まだ太陽が顔を覗かせたばかりの第4陸士訓練校宿舎。

口の字型になっている宿舎の中庭で、3人の少年が向かい合って立っていた。

うち2人はジャージ姿のハヤトとルーク。そしたもう1人は、同じくジャージ姿の、茶色の髪を肩まで伸ばした、青緑の瞳が印象的な少年 ユウキ・エレンリッドだ。

「いくぜ、ユウキ？」

「ああ。ルークも準備はいいか？」

「モチのロンよ」

3人はお互いの顔を見てから、不敵な笑みを浮かべた。
そして

「おっぱい体操〜〜！ 第一〜〜〜〜！！！」

「まずは腕を上下させておっぱいを賛美する運動から！」

「さんはい！！！」

「「「（。。。）〇ミ。おっぱい！おっぱい！」「「

3人は腕を思い切り上下させ、宿舎中に響き渡る程の大声で掛け声を上げる。

おっぱいおっぱいと叫ぶ彼等の額には汗が光り、その表情にはやり遂げたかのような表情が浮かんでいる。そして、それを数十分繰り返していただろうか。

一応の終わりを見たようで、彼等は腕を振るのをやめて次の動作を大声で叫ぶ。

「次はー全身を回しておっぱいを崇める運動ー！」

「さんはい!!」

「○○○○ おっばい!おっばい!」「」

続いて3人は上半身をぐるぐる回しながら、再びおっばいおっばいと大声で叫ぶ。

そりやもう宿舎中どころか、近隣一帯に響き渡るような大声で。現在の時刻は早朝の4時を少しだけ回ったあたり。早朝訓練などがあり、比較的早い起床時間を決められている訓練校でも、極めて早すぎる時間である。

普通に考えればやらないし、仮にやったとしても、もう少し自重するものだ。

けれど、3人は自重しない………どここの騒ぎではなく、より一層声を張り上げていく。

「続いてー上下に飛び跳ねておっばいに感謝する運動ー!!」

「「「おっばい! おっばい!」「」

「さらに反復横跳びをしながら、おっばいへの敬意を示す運動ー!!」

「「「おっばーい! おっばーい!」「」

「更に更に、シャドーボクシングをしながら、おっばいの素晴らしさに感動する運動ー!!」

誰がなんと言おうとそうなのである。
そ、そうなんだったら！ やめて！ そんな疑わしい目で見ないで！！

陸士訓練学校のドタバタな日常

第2話 『彼等は基本的にノリで生きています』

朝の騒ぎから数十分後。

ハヤト、ルーク、ユウキの3人は宿舎で最も広い待合所に居た。
だが、その場に居るのは彼等だけではなく、他にも数多くの人間が顔を連ねていたりする。

「じゃあ朝練まで時間も無いし、とっとと裁判を始めろぞ。
被告人ハヤト、ルーク、ユウキは前へ」

やや跳ねた茶色の髪を持った少年が、その鋭い金色の瞳で3人を見据え、待合所でもっとも大きなソファに座ってそう促す。
どうやらここを簡易的な裁判所に見立てているようだ。
それに伴い、ざわざわと俄かに辺りが騒がしくなる。

「裁判長はコイツらと同じクラスのクラス委員である俺、氷上京谷が務めさせて貰う。」

問題が無ければ始めたいが、何か言う事がある奴はいるか？」

あたりを見回して確認する京谷の問いに、周りからの野次馬からは「異議なーし！」「さつさとやれー！」という声が返ってくる。どうやら宿舎にいる殆どの人間が集まっているようだ。なんだかんだで皆暇人らしい。

「では、今回の事件の経過を私、アウルⅡアパレシオンから説明させていただきます」

そんな中、私服姿の多い野次馬の中から既に訓練生の制服に着替えた少年が歩み出る。

雪のように白いミドルロングの髪を首の後ろで括り、髪色とは真逆の黒い瞳を持ったその少年　アウルは、どこからか持ってきたファイルを片手に語り出す。

「事件が起きたのはつい先ほど。まだ朝の4時を過ぎたばかりの早朝に起きました。」

彼等は……詳しいところは冒頭の部分を読んでくださいね」

「おい、メタんな」

「失礼。それでは事情を説明させていただきます。」

かくかくしかじか、以上がこの『早朝睡眠妨害事件』の全容になりますね。

我々の睡眠時間はあまりにも突然に、そして無慈悲に奪われました。しかも彼等が奪ったのは、ただの睡眠時間ではありません。

昨日の訓練で疲れ果てた私達にとって、1分1秒でも長く貪っていた朝の睡眠を奪ったのです。

これは私が生きてきた中でも、類を見ない程の凶悪な事件ですよ」

アウルは目頭を押さえ、沈痛な面持ちで首を横に振る。

そんな彼の言葉にあちこちらから「そうだそうだー！」とか「ぶっ殺せー！」という声が上がった。

「待つてくれ！俺達に悪意は無かったんだ！」

「そうだそうだ！ちょっとおっぱいについての情熱が溢れただけなんだ！」

「おっぱいに罪はない！つまり俺達にも罪は無い！」

「しかも本人達に反省の色は無い。実に嘆かわしいことです」

頭痛を堪えるような仕草をするアウルに、野次馬達からは同情の声が聞こえてくる。

中々に堂の入った検事役である。本当の法廷でも戦えるのではないだろうか。

「ハヤト君、ルーク君、ユウキ君。もう少し反省したらどうか？
君達が騒ぐのはいつもの事としても、もう少し時間を考えるとか
……というかりオス君は？」

「あ、リオスなら昨日胃痛で倒れてまだ帰ってきてないぜ」

「何かマリーナ教官の話だと、ストレス性の急性胃潰瘍とかなん
か」

「おいおいハヤトにルーク。お前らどんだけ迷惑かけてんだよー」

「いや、そんなにかけてねーって」

「だよなあ。昨日だって、大したことしてねーって。ちょっとアイ
ツの部屋にエロ本を隠そうとして、それを左教官に見つかって3人
揃って怒られただけだし」

いつもならば、こうなる前に止めている筈のリオス「コーネルド
の不在に気付いたアウルが尋ねてみれば、返ってきた答えは予想の
斜め上……むしろ空の彼方なものだった。

悪びれもしないハヤト達に、アウルは呆氣に取られ、京谷は「お
いおい」と頭を抱えた。

それ以上に、いくらリオスが女装が似合う人間だからといって、
彼に女装させて心を癒すというのはどういうことなのか。虚しすぎ
るだろう、常識で考えて。

「何だ、いつも通りじゃん」

「「だろー?」」

「……検察側としましては。彼等に極刑を望みます」

「「「何で?!?」」」

反省の欠片もないハヤト達に辟易しつつ、アウルは溜息と共に結論を出した。

もちろんハヤト達がそれに納得する訳もなく、3人は思い切り立ち上がって抗議の声を上げる。

「ただ朝の体操をすることも出来ないなんて! この国はどうなっているんだ!」

「そうだ! 俺達には自由に生きる権利がある!」

「おっばいは正義!」

「黙れ」

「「「はい」」」

しかし、そんな3人の抗議は京谷のひと睨みで掻き消されてしまふ。

こうやってハヤト達を黙らせる事が出来るあたり、クセの強いハヤト達のクラスを纏めているのは伊達ではないという所だろう。

「では次に被害者達の声聞いてみようじゃないか。被害者代表、前へ出てもらえるか」

やれやれと溜息を吐く京谷に促され、2人の少女が前に出る。

1人は薄いブラウンの髪を肩の辺りで揃えた、勝気な印象を受ける少女。

そしてもう1人は、腰まで届く藍色の髪が特徴的な、悪戯好きな猫のような印象の少女だ。

「2人とも、名前を言ってもらえるか？」

「ミコト〓タツナミよ」

「草薙くさなぎ 蒼そうだ」

「知ってる。クラスメイトだからな」

「じゃあ聞くな!」

ぶっきらぼうに言い放つ京谷に、揃ってツツコミを入れるミコト達。

それから一度仕切りなおすように咳払いをしてから、2人はそれぞれ口を開く。

「被害者としてはふざけんなって話よね。

こっちは昨日、左教官にしごかれたせいで疲れてたっていうのに、
ねえ京谷、裁判とかいいから私達に任せない？ 私の電撃で一発
よ、こんなの」

「むしろ被害者全員に一発ずつ殴らせろ。私達はその権利を十二分に有している筈だ。

何、手間は取らせん。ものの数秒でカタがつく」

喋りながらポキポキ指を鳴らすミコトと蒼。

ハヤト達はそれを見て体を震わせながら思い切り後ずさって悲鳴を上げる。

「ま、まで！ 落ち着いて話し合おう！」

「そうだ！ 俺達には言葉があるじゃないか！」

「それに本気で悪気は無かったんだよ！ ちょっと徹夜でゲームしてて、テンションおかしくなってる衝動的にああいう事をやってしまっただけで！」

「へえ。じゃあアンタ達は、衝動的に私達の睡眠を妨害したわけね？
どーにもアンタ達、3人揃ってサンス・リバーを渡ってみたいらしいわねえ……」

「「「はうあ！？」」」

何とか自分達を擁護しようとして、わざわざ地雷を踏み抜く3人。
ここまで見事だと、

もはやワザとやっているんじゃないか、と思ってしまう程だ。

まあ、実際にはただ単純に必死すぎて自分達が何を言っているのか分かっていないだけなのだろうが。

「蒼、やるわよ」

「いいだろう、たまには本気でいくとしよう」

「「「ちよつとおおお!?!」」」

ミコトが自分の周りにバチバチと火花を散らし、蒼はそれぞれ拳を固めて目にも留まらぬスピードで、空気を切ってシャドーボクシングを開始する。

どう見ても殺る気マンマンです。本当にありがとうございました。
野次馬達もそんな彼女たちに触発され、それぞれが拳を固めているようだ。

「まあ落ち着け。まだ判決は出ていないぞ」

「……ちっ」

「命拾いしたな。オマエ達」

しかし彼女達が手を出すよりも先に、京谷が手で制してそれを止

めた。

「被害者達の気持ちは痛いほどよくわかった。
では、今度は被告の弁護人に登場して貰うとしよう。弁護人、入
ってくれ」

「どうも、被告人達の弁護人を務めるアルトリア・ムーンライトで
す。

本日はよろしく願いしますね」

次に野次馬の中から歩み出たのは、少女と見紛う外見をしたやや
小柄な少年、アルトリア。

彼もまたアウルと同じく訓練校の制服に身を包み、長い金色のポ
ニーテールを揺らしながら地面に正座させられたハヤト達の前に出
る。

「えっと、ハヤト達は日頃からこういった迷惑行為を繰り返してた
みたいだよ？

こんな風に怒られるのも、1回や2回じゃなかったみたいだね」

「ふむ」

「ちなみに4日前の朝にも今日と同じ事をして怒られてるね」

「つまりは再犯、という事か」

「うん。そういうことになるかな。」

けど実際、悪気自体はないみたいだし、多少情状酌量の余地はあるかな。

掛け声の五月蠅さとか、叫んでる声の大きさとかはともかく、やってることは一応体操だしね。

その辺りも踏まえて、弁護側としては……」

アルトリアはそこで一度言葉を区切り、それから正座した3人を一度だけチラツと見つめてから、一度咳払いをして結論を述べた。

「特に弁護する価値を見出せませんので、死刑でいいと思います」

「「「おいイイイイ！！ 弁護しろよおおお！！」」」

「ぶっちゃけるとね、正直勢いで弁護人役をやったの後悔してるんだ」

「「「自分で言い出しておいて！？」」」

「安眠妨害は死刑っていうのが、ウチの家訓なんだよね。だから死刑でいいと思います」

「「「何で2回言ったし！！」」」

可愛らしく首を傾げて、ちよろつと舌を出しながら告げるアルトリア。

もちろん嘘だが、今この場にハヤト達のツッコミに同調する人間は居ない。誰だって、朝っぱらから馬鹿騒ぎをされて安眠妨害をさ

れば、文句のひとつどころか殺意だつて覚えるだろう。

仮に前日の訓練がなければギリギリ許して貰えたかも知れないが、現実是非情だ。

「よかるう。ではそろそろ朝練の時間も迫ってきたから判決といこう。」

検察側、弁護側、そして被害者側。その全員からの証言を纏めた結果……」

「異議あり！ 明らかに俺等が有利になる証言が無かった！」

「弁護人も弁護してなかったし！」

「この裁判は違法だ！ 正義が無い！！」

「異議は却下だ。裁判長役にも飽きてきたしな」

「『ええ』……」

身も蓋も無くハヤト達の抗議を一刀両断する京谷。

まあ実際この裁判（笑）が始まってから既に30分近く。飽きてきても仕方ないのかも知れない。

「……うん。やっぱり飽きてきたな。ミコト、蒼、後は頼んだ」

「りょーかい」

「いいだろう。任せておけ」

「結果は後で教えてくれ。俺は部屋に戻って授業の準備をしてくる」

どうやら本気で飽きていたらしく、京谷はひらひらと手を振ってソファから立ち上がってどこかに行ってしまう。立ち去る時の彼の指示に従い、ミコトと蒼の2人が裁判長席であるソファに腰掛けた。ただ、いくら大きいとはいえ1人掛けのソファに2人で座るのは、流石に細身の2人でも狭いようでありぎゅうぎゅう詰めだったりする。

「ちよつ、狭いわよ蒼！ アンタちよつと立ちなさい！」

「ふざけるな尻でか女。お前が立つべきだ」

「誰のお尻がデカイですつてえ！？」

「ふん、お前に決まっているだろう？」

余分な贅肉が胸ではなく尻に溜まっているのではないのか？」

「なななな……！？ だ、誰が貧乳よ！ アンタだって変わんないでしょ、この貧乳オブ貧乳！」

「よしいい度胸だ表に出ろド貧乳め」

席の狭さを発端として、お互いの胸を貶しながら怒鳴りあうミコトと蒼の2人。

ぶつちやけ傍目からはどちらも変わらないのだが、本人達は「自分の方が大きい」という自覚があるらしい。……どっちもAカップ未満なのにな。

「前々からアンタの態度は気に食わなかったのよ！」

今日こそ、私の方が大きいって事を、その貧しい胸に教えてあげるわ！」

「おかしな事を言うな超ド貧乳。私の方が大きいに決まっているだろうが」

「なによ！」

「なんだ？」

被告席に居るハヤト達をそっちのけで、2人はヒートアップしていく。

そのせいでグダグダになっていく空気を感じ、野次馬達も1人また1人と立ち去っていった。

実際のところ、全員そろそろ飽きてきていたのだろう。朝練の近いことも、原因ではあるけれど。

「あー、またグダグダになっちゃいましたね。どうしよっか？ アウル」

「うーん……仕方ない。私達で判決を下してしまうとしましょうか。ああ、ハヤトさん、ルークさん、ユウキさん。逃げようなんて思

わないでくださいね？

逃がしませんから」

「「ぎくっ！」「」

「許さないよ、絶対にだ」

騒ぎに乗じてこっそり逃げ出そうとしていたハヤト達の首根っこを掴み、アウルとアルトリアの2人がにつこりと笑う。

ハヤト達はこの時、2人の浮かべた朗らかな笑みが、死神の笑みに見えたと後に語った。

アウルとアルトリア。普段は温厚だが、怒ると怖い2人である。

「さて、判決はどうしましょうか」

「そうだな……あ、アウル。丁度いいのがあるよ」

「丁度いいもの？」

「あれあれ」

アルトリアの指差す方を見れば、そこには臨戦態勢のミコトと蒼の姿があった。

ミコトは全身に雷を纏い、バチバチと火花を散らす。

対する蒼はゆっくりと腰を落とし、すぐにでも飛びかけられるような体勢を取っている。

まさに一触即発。2人の間の空気が、ビリビリと震える程の殺気

まで感じる程だ。

そんな2人を見て、アウルは「なるほど」と頷く。

どうやら、アルトリアが言わんとしている事に思い至ったらしい。

「ハヤトさん、ルークさん、ユウキさん」

「時間もそろそろアレだし、判決を言うね」

「「「……ごくり」」」

アウルとアルトリアはゆっくりと3人を振り返り、まず見た者全てを魅了する笑みを浮かべた。

次に彼等は、口を揃えて判決を言い放つ。無慈悲に、無感情に。

「ミコトさんと蒼さんの喧嘩を止めてください」

「ただし、2人を怒らせてからね」

「「「oh...」」」

「ちなみに従わなかった場合は、左教官に怒ってもらってからね」

「では、私達はそろそろ授業の用意をしなくてはいけないので、部屋に戻らせて頂きます。

頑張ってくださいね」

最後にそう言いながら手を振って、自分達の部屋に戻っていく2人。

呆然と彼等を見送ってから、3人は恐る恐る言い争っていたミコトと蒼を見た。

「最初っからフルパワーでいくわよ。消し炭になっても恨まないでよね」

「そっちこそ、私の一撃で骨が折れないように気をつけるんだな」

ミコトも蒼も、既に周りなど見えていないらしい。

その表情に浮かぶのは明らかな殺意だ。よほど貧乳を気にしていると見える。

本当なら、3人は逃げ出したかった。

クラスメイトなのだから、ああなった2人が危険すぎるのは百も承知している。

しかもアルトリアの指示は、更にあそこから怒らせた挙句に喧嘩を止めなければいけない。そんな事が不可能だということは明白すぎる事。

けれど、2人を止めなければ、彼等にとって天敵とも言える左舞教官がやってくるのだ。

いくら嫌でもやらなければならない……世の中、こんな筈じゃなかった事ばかりだよ。

「怒らせる役は俺がやる。お前達は逃げる準備だけをしておけ」

「へっ……馬鹿野郎。ハヤト1人にいいカッコさせるかよ！」

「そうだぜ、旅は道連れ世は情け。俺たちも一緒にやるぜ！」

「お前ら……全く、幼馴染のルークはともかく、ユウキも大概だな」

「はっはっは！」

悲壮な決意を固めながら、お互いの肩を叩いてひとしきり笑いあ
う。

そして3人は顔を見合わせてひとつ頷くと、大きく息を吸ってそ
れぞれに叫んだ。

「ミコトのどひんにゅー！」

「蒼の胸はえぐれ胸ー！」

「お前ら揃って豊胸パッドでも使ってなー！」

「なああんだとおおおー！！！！？」

「ひいっ！？」「ひいっ！」

ハヤト達の子供じみた中傷に、ミコトと蒼は修羅の如き表情で振
り返る。

その顔を見た瞬間、ハヤト達は反射的に駆け出していた。

振り返ったら、足を止めたら、その瞬間に狩り取られる。

人としての……いや、生物としての本能がそう叫んでいるからだけれど、悲しいかな。追う側と追われる側で、今回はあまりにも差がありすぎた。

魔導師としてのではない。

生物としての性能でもない。

“生き延びたい”という想いと、“狩る”という絶対の意思。そこに、どうしようも無い程の差があったのだ。

「や、やめて、許して……！」

「ぷるぷる……やめて！ ボク悪いルークじゃないよ！」

「こんなの絶対おかし……せめて最後まで言わせてください!!」

「知ったことかあああああ！！！！！！」

「「「ぎゃあああああ！」」」

彼等が逃げ出してから数秒後。

宿舎に、狩られた者達の悲鳴が響き渡った。

第4陸士訓練校。

ここでは日夜厳しい訓練と、一流大学も真つ青な座学を教えている。

もちろんそこに在籍している生徒達は、その全員が自分に厳しい人間達だ。

これは、そんな第4陸士訓練学校の厳しくも楽しい日常を描いた物語である。

……そうだと、いいな。

・今回のおまけ

『京谷とユウキ』

ユ「なあ、京谷」

京「ん？ なんだ？」

ユ「俺が頭良くなったらモテると思うか？」

京「不可能な夢を見るな」

『アルトリアとミコト』

ミ「ねえ、アリア」

ア「どしたの、ミコト？」

ミ「何をしたら、胸って大きくなるかな？」

ア「何で俺に聞くの？ 俺男だよ？」

『蒼とアウル』

蒼「アウル、少しいいか？」

アウ「何でしょう？」

蒼「さっき雑誌で、男と（自主規制）をすると胸が大きくなると書いてあった。

だから手伝え。今すぐにだ」

アウ「全力でお断りします」

第2話 『彼等は基本的にノリで生きています』（後書き）

キャラ崩壊ってレベルじゃねーぞ！
どうも、ラモンです。

だ、大丈夫かな今回…… 大分キャラ崩壊しちゃってる人たちが居るような…… 怒られたら即行で直そう。
そんな感じの第2話でした。

やっぱり人が多いと難しいですね。

しかもまだ紹介していないキャラクターを登場させているので、紹介とあわせると中々どうして難しい……。

今回は京谷さん、アルトリア君、アウルさんあたりが酷いキャラ崩壊をしちゃってる気がしますし。

ノリで書いていると、こういう時に困りますね。

ちなみに、クラスメイト枠の皆さん…… 特に男子は結構な勢いで3馬鹿枠みたいな動きをしてもらう場合があります。

基本的に3馬鹿は固定ですが、今回みたいに誰かが3馬鹿枠に巻き込まれる場合もございますのでご注意ください。大概酷い目にあります。

とりあえず今回で3馬鹿、クラスメイト枠の皆さんは殆ど出演させる事が出来ました。

次回からは上級生枠、生徒会枠、クラス委員（女）枠、女子クラスメイト枠の最後の1人、そして教員枠の皆さんをメインに据えたいと思っています。

どうなるか分かりませんが、頑張りますので怒らないで見てくださいます。

それではまた、次の話で。

自分のキャラの扱いに納得いかない場合、すぐにメッセージなどでお知らせくださいませ。出来る限り修正します。

第3話 『生徒会役員共と、巻き込まれた少女達』

第4陸士訓練校。

ここでは日夜厳しい訓練と、一流大学も真つ青な座学を教えている。

もちろんそこに在籍している生徒達は、その全員が自分に厳しい人間達だ。

これは、そんな第4陸士訓練学校の厳しくも楽しい日常を描いた物語である。

陸士訓練校は、当たり前ながら陸戦魔導師を始めとした数々の魔導師を教育する機関だ。

しかしその反面、普通の学校としての側面も持っている。

その最たる例として挙げられるのは、生徒会がある事だろう。

生徒会のメンバーは、役職ごとに立候補した中から選挙で選ばれる。

とはいえ、生徒会と言えば「面倒ごとを押し付けられる」というイメージを持つ人間が多いため、実際は立候補すれば間違いなく当選という状況ではあるのだが。

そんな現状もあって、生徒会のメンバーは現在僅か4名。
しかもその全員が、中々に濃い面子になってしまっているのだ。

「ねえ、ハヤブサ」

「あん？」

その生徒会のメンバーである2人の少年、リョウガ「ヤマトとハヤブサ」ヴェヌーシアは、それぞれ自分用に宛がわれた机の前でパソコンに向かっていた。

「さっきから仕事が全然進んでないみたいだけど、何やってるの？」

青緑色の目でパソコンの向こうから反対側の席に座る人間を睨みつけるのは、リョウガ「ヤマト」。

若干10歳でありながら、飛び級でこの訓練校の最上級生として通い、生徒会では会計を任されている天才児だ。可愛い顔つきもあって、特に女子の訓練生からの評判がよく、この第4訓練校ではそこそこの有名人だったりする。

「あー？ ゲームやってる」

そんなリョウガの鋭い視線を受けつつ、平然とパソコンの画面を見つめているのがハヤブサ「ヴェヌーシア」。赤いウニのような髪形

が特徴的な17歳男子。

ハヤト達の上級生に当たる訓練生で、一応生徒会の書記を担当している。

「ねえハヤブサ。僕は必死になって君の倍以上はある書類をやつてるのに、まさか君はこともあろうに生徒会室でエロゲをやつてるの？ 何なの？ 馬鹿なの？ 死ぬの？」

「はあ？ いい加減リトバスをエロゲと勘違いしてる奴うぜえ。エロゲじゃないし。T O L O V Eとかの方がよっぽどエロゲ」

「エロゲじゃなかったら何なのさ」

「筋肉……かな？」

「うわぁ……」

パソコンの画面から窓の外へと視線を移し、遠い目でそう呟くハヤブサに、リョウガは本気でドン引きした。まあ、実際リョウガでなかったとしてもドン引きしただろうが。

ちなみにF a t eは文学、A i rは芸術、クラナドは人生だ。

「って、そんな恒例のやり取りは置いといて。仕事は終わったの？ 何か見た限りだと、全然進んでないように見えるんだけど」

「は？ 仕事とか超面倒くせえし。そんな事より野球しようぜ！ 俺達のチーム名は『ハヤブサバスターズ』な」

「仕事しないならへし折るよ？」

「どこを！？ つーか何で俺の股間をガン見なんでせうか！？ ちよつ、やめてえっ！！」

不穏な箇所を見ながら手をボキボキと鳴らされ、ハヤブサは慌てて自分の股間を押さえ、椅子ごと飛び上がって後ろに下がる。男の勲章をへし折られたらフラグも立てられないからね！

「はあ……別に仕事しないならそれでもいいけどさ。怒られるの僕じゃないし」

「えー。もう少し構ってくれよりヨウガ、俺達友達だろ？」

「10歳の子供に構ってくれって頼む17歳ってどうなの？」

「こまけえこたぁいいんだよ！」

「細かいじゃないじゃん」

ハヤブサの言葉に、リョウガは呆れた声で返しながら再び手を動かした。

実に手馴れた対応である。まあ、なんだかんだと殆ど毎日ハヤブサの相手をしているのだから、嫌でもリョウガにも耐性がつくというモノだろう。

本人に聞いたら、「こんな耐性欲しくないんだけど」と言うのは

目に見えているが。

「っと、そういや今日会長と副会長は？」

そこでふと気付いたとばかりに、ハヤブサが尋ねる。

ハヤブサの問いに対して、リョウガは今日何度目になるか分からない溜息を、これ見よがしに深々と吐いてみせてから渋々という感じで答えを返す。

「はあああああ……………会長と副会長は、学内の治安維持の為に回り中だよ。」

昨日さんざん言われたじゃない。聞いて…………無かったんだろうけどさ、ハヤブサは「

「ふつ、そんなに誉めないでくれたまへ。照れるじゃないか」

「誉めてない。まったく微塵も欠片も小指の先ほどすら誉めてないから」

「またまた、リョウガちゃんてば照・れ・屋・さ・ん」

ウザいスマイルを浮かべ、反対側の席まで手を伸ばしてリョウガの額を軽くつつくハヤブサ。

…………それはそれは、見るもの全てがイラッとする程、見事なモノであったと言う。

もちろん、それにイラッとしたのはリョウガも例外では無く。

「ねえ、ハヤブサ？」

「はいはい、なんでせうか？」

「全力攻撃と、全身全霊攻撃、どっちがいい？」

「……それ、どういう違いがあるんだ？ 説明願いたい」

「簡単に言つと、Die or Death」

「どっちも死んでるじゃん！？」

「大正解。じゃあ……死のうか」

後光が差してきそうな神々しい笑みを浮かべてリョウガがそう言
った次の瞬間、生徒会室から灰色の光が溢れ、次いで凄まじい爆発
音が轟いた。

第4 陸士訓練校。

ここでは日夜厳しい訓練と、一流大学も真つ青な座学を教えてい
る。

もちろんそこに在籍している生徒達は、その全員が自分に厳しい人間達だ。

これは、そんな第4陸士訓練学校の厳しくも楽しい日常を描いた物語……の筈である。

多分、きっと、おそらく。

陸士訓練学校のドタバタな日常

第3話 『生徒会役員共と、巻き込まれた少女達』

「ごめんねー、美卯。私の用事に付き合わせちゃって」

「いいよ別に。友達が困ってたら、手伝ってあげたいもの」

リョウガとハヤブサの2人が生徒会室で生死を賭けた戦いを繰り広げている頃。

訓練校から宿舎へと続く道を、2名の少女が歩いていた。

「にしし、優しいにゃ〜。だから美卯ってば大好き！」

そう言っただけに笑うのは、背中まである深緑色のポニーテールを揺らす活発そうな少女、ソフィア「ジュリーストン。ハヤト達のクラスメイトであり、クラス委員でもある女の子だ。

ちなみに、低めの身長には不釣り合いな、たわわなおっぱいの持ち主でもある。

……え？　そういう情報知らない？　またまた、遠慮しないでいってば。

「もー、ソフィアはすぐそうやって誤魔化すんだから」

ソフィアの人懐っこい笑みに苦笑して、彼女の額を軽く小突くのは山城美卯。

彼女よりも短く、肩よりも少し上までしかないこげ茶色のポニーテールが特徴的な女の子で、ハヤト達のクラスメイトでもある。

「そういえば、ソフィアは今日この後どうするの？」

「んー？　宿舎に帰って、スバルとゆずの3人でゲーム大会でも、って感じかな？」

「またそんな不健康な……」

「だってー、あと数日後にはクラスのゲーマー全員対抗モンハン大会があるんだもん。」

今のうちから頑張って、いい装備整えておかないとね！」

「ああ、そういえばそんなのあったね。」

あれって結局誰が主催して……って、そんなのハヤトしかないよね」

「ううん？ 左教官だよ？」

「oh...」

衝撃の真実に思わず言葉を失う美卯であつた。

まさか、ゲーム大会を自分達の担当教官が主催しているとは夢にも思つまい。

むしろ十分に予想していたからこそその反応かも知れないが。

「今のところ、ハヤトとルーク、リオスの幼馴染組が優勝候補なんだよね。

だから、私もスバルとゆずの2人と力を合わせて、あの3人をぎやふんと言わせてやるのさ！

ふははははー！」

「……なんかそれ、先月も聞いた気がする」

「……だってあの3人強すぎなんだもん」

冷静にツッコまれ、ソフィアはしょぼーんと肩を落とす。

実はこの【クラスのゲーマー全員対抗モンハン大会】は毎月行われており、今のところハヤト・ルーク・リオスの幼馴染チームが3連覇中である。

「でも、ソフィアは先月ので2位だったじゃない？ 1位じゃないと駄目なの？」

「そりゃそうだよ。だって、1位になったら左教官からジュース奢ってもらえるし」

「うわ、何とも即物的な……」

嬉しそうに顔を上げるソフィアだったが、美卯は彼女が話す内容を聞いてまた溜息を吐いた。

ちなみにこの1位の景品、ハヤトとルークは1度も奢ってもらった事が無かったりする。

舞曰く、「可愛くない奴に奢るお金は無い！」との事だ。それでも優勝してしまうあたり、ハヤトとルークは意外とMなのかも知れない。いや、単純にゲーム好きなのだろうが。

「先月はあとちょっとまで行ったからねー。今回こそは絶対に勝つよー！」

「無理だと思うけどなあ。リオス君はともかく、ハヤトとルークの2人は、成績……というか生活全般を犠牲にゲームをやっているとこあるし」

「ふふふ、だから私達も今回は成績を犠牲にする覚悟なんだよ！」

「いや、駄目でしょ」

自信たっぷりな顔で胸を張るソフィアにツツコミをいれ、美卯が苦笑する。

まあ本当に成績を犠牲に……とは美卯も思っていない。なにせハヤトとルークがどのくらい成績を犠牲にしているのかといえば、それこそ座学の最中でさえゲームをやるくらいだ。

ソフィアは根が真面目だから、そこまで馬鹿な事は出来ないと知っているのだろう。

「それじゃあ早く帰ろっか。ゆずやスバルも待ってるみたいだし」

「だね。一杯練習して、今度こそハヤト達をぎゃふんって言わせるんだ」

「はいはい、頑張ってね」

そんな風に楽しそうに言葉を交わしながら歩いていた2人だったが、ふと自分達の視界の端に妙なモノを見つけて足を止めた。

「……」

「……」

2人の視線の先 校舎から宿舎へと続く道の脇に植えられている街路樹の側には、コソコソと隠れてあたりの様子を伺っている1人の少年……ハヤブサが居た。

どうやら生徒会室でリョウガから攻撃された後、何とかここまで逃げ延びていたらしい。

それを見つけた美卯は、暫く彼の様子を眺めてから胸のポケットから携帯端末を取り出し

「あ、警察ですか？ ええ、不審者です。第4陸士訓練学校の側の」

おもむろに警察に電話した。

「ちょーっと待ったー！ーっ！！」

「おっとー！？ ここでハヤブサ先輩のちょっと待ったコールだー！！」

「なんでナチュラルに警察に連絡しようとしてるんでせうか！？ 酷くない！？」

「ハヤブサ先輩、ご自分の今の姿を見てから言ってください」

「いやそれを言われると何も言い返せませんが！」

通報しようとした美卯に抗議するものの、どうやらハヤブサ自身も自分の格好が、どこからどう見ても不審者だという自覚はあったらしい。

「まあ大丈夫ですよ。本当に通報してる訳じゃないですから」

「え、そうなの？」

「そうですよ。ハヤブサ先輩がそうやってコソコソしてるのって、結構日常茶飯事ですし」

「私達……というか、訓練校の皆が見慣れてるしね」

「否定しきれないのが悔しい」

がつくりと肩を落として落ち込むハヤブサだが、決して自分の素行を改めようと思わないらしい。

そのあたりが彼の悪い点でもあるが、だからこそハヤブサは上級生でありながらハヤトと仲が非常に良かったりする。まあ、単純にハヤトが素行不良でよく生徒会室に呼び出されているのも一因だけれど。

ともあれ、ソフィアと美卯はきやいきやい楽しそうにハヤブサを弄る。

「ていうか今日はどっちから……ああ、隠れてるって事はヤマト君からですね」

「だね」。みっちー先輩からなら、こんなところで隠れてないで、もっと遠くまで逃げてるだろうし」

「俺の行動見破られすぎワロタ」

「それだけハヤブサ先輩が追っかけられてるって事ですょ」

やれやれと溜息を吐きながら、美卯が肩を竦めた。実際ハヤブサがこうして逃げ回るのは殆ど毎日で、ある種の恒例行事として訓練校中で有名なのだ。

もちろん“殆ど”毎日なのであって、本当に毎日な訳ではない。

せいぜい2日に1回くらいの……あれ？ これもう毎日でよくね？

「まあそれは置いといて」

気を取り直したハヤブサが一旦話題を切り、次の話題につなげようとしたその時。

「待ていつ!!」

「「「!?!」」」

突如、凜とした声が辺りに響く。

その声に男達が慌ててあたりを見回せば、ソフィア達から少し離れた場所にある丘の上に、1人の少年が腕を組んで立っているのが見えた。しかし彼の顔だけは、不自然な逆光で見ることが出来ない。

「悪しき星が天に満ちる時、大いなる流れ星が現れ……」。

その真実の光の前に、悪しき星は光を失い、やがて墮ちる……。

人、それを「裁き」という……！！」

逆光に照らされたまま、少年はすらすらと口上を述べる。

そんな少年の口上に、ハヤブサが怯えの混じった怒鳴り声で問いを投げた。

「誰だアンタはっ！？」

だが、その問いに対する少年の答えは短く、明瞭なもの。

「貴様に名乗る名前はないっ！！」

言っが早いか、少年は高々とジャンプして空中に綺麗な放物線を描き、ハヤブサの後ろに着地する。

すると、逆光で見えていなかった少年の顔がソフィア達からようやく見えるようになり、その顔を見たソフィアと美卯は「あれ？」と声を揃えて少年の名を呼んだ。

「御剣副会長じゃないですか」

「みっちー副会長だ、やつほー」

「……っ、おいお前達。こついつ場面で名前をバラすな、お約束は守るべきだろう。」

それからみっちーと呼ぶなと何度言ったら……」

折角の登場シーンを邪魔され、不満そうに頭を振る少年の名は御^み剣^{けん}仁^{ひとし}。

この訓練校の生徒会副会長であり、訓練校内でも5本の指に入る実力者として有名な少年だ。

「ごほんっ。まあ、それは今は置いておくぞ。それよりもハヤブサ、逃げるな」

「ぎくっ！」

咳払いと共に一度話題に区切りをつけ、それから御剣はかけている銀縁の眼鏡を軽く上げながら、背中の半ばまである黒髪をかき上げ、こっそりとこの場から立ち去ろうとしていたハヤブサを睨みつけた。

睨まれたハヤブサはギギギと音が鳴りそうな程にゆっくり振り向き、冷や汗をダラダラ流しながら愛想笑いを浮かべるのだった。

「い、嫌だなあ別に逃げないですよ？　これはちょっと前衛的な運動でして……」

「言い訳はいい。まったく、お前は何故わざわざリョウガを煽るんだ。」

お前のせいで書類が散乱して面倒なことになっているんだぞ。破けてたり燃えていない分マシとはいえ後片付けがどれだけ面倒だと思っっている」

「いやあ、リヨウガの反応が面白くてついつい」

「ついで毎回書類をあらされてたまるか。その後始末に私と朔也がどれだけ苦労しているか。」

くそっ、また胃薬を追加注文せねば……」

「みっちー副会長大変ですね」

「胃薬の量が増えたって聞きましたけど、大丈夫ですか？」

深い溜息を吐く御剣と、そんな彼の肩をたたいてのほほんと笑うソフィア。

美卯は心配そうな顔で彼の顔を覗きこみ、ハヤブサは「てへぺろ」と可愛らしく舌を出していた。男のてへぺろは死罪に値すると思うんだがどうだろう？

などという戯言はともかく。

胃の痛みに御剣が顔をしかめてくると、彼がさっきまで立っていた丘の影から、大きな照明用ライトを抱えたやや短めの黒髪をもった少年が、少しばかり覚束ない足取りで歩み出る。

「み、御剣君！　これ重いから手伝って欲しいんですけど……」

「な！？　朔也！　それはそこに置いておけと言っただろう！？」

「いえ、ですがこのままここに置いておくと、帰るときに私が忘れそうだったので」

「私が覚えておくし、運ぶのも私がやると言っただろうが!？」

恥ずかしそうな表情を、そのやや大人びた顔に浮かべて現れたのは、この第4訓練校の生徒会長を務める月城つきしろ朔也さくや。怒る事が殆ど無く、誰にでも分け隔てなく接する彼は、一部では「仏の月城」と呼ばれている。

「ですが、御剣君の登場を演出するために借りてきたものですし、早めに返さないと……」

「だから返却は後で私がちゃんと自分でやると……ああもう、そんなフラフラしてまで抱えるな!

落としたら弁償になるだろう!? とりあえずそこに下ろせ!

……くう、また胃がキリキリと」

「す、すいません。それじゃあ……よつと。いやあ、重いですねこのライト」

持っていた大型ライトを地面においてから、朔也はもう一度照れくさそうに笑う。

そんな彼の声に頭を抱えて胃の辺りを押さえる御剣に苦笑しつつ、美卯は地面に置かれたライトと朔也の顔とを見比べ、首を傾げてみせた。

「月城先輩。そのライト、どうしたんですか？」

「ああ、御剣君が演出に使いたかったみたいで、ちょっと教官室から借りてきたんですよ」

「御剣先輩が……なるほど、さっきの不自然な逆光はコレが原因でしたか」

彼の説明に納得がいったのか、美卯はライトの方を見ながらしきりに頷く。

「わはー みっちー副会長は相変わらず手を抜きませんねー」

「当然だ。やる以上は何事も徹底的にやる、それが生徒会役員の血の掟だからな」

「いやいやいや！ 俺そんな物騒な掟聞いてませんけど!？」

「言っていないからな」

あっさりと言いきる御剣に、ハヤブサは右手で顔を覆って天を仰ぐ。

そしてハヤブサは天を仰いだまま、御剣に向かって問いかける。

「もし破ったらどうなるんでせうか？」

「なに、ちょっとしたペナルティがあるだけだ。具体的には他の生徒会役員に1週間学食を奢る、程度なものだな。軽いものだろう?」

「わーお、流石にこの事実にはヴェヌーシアさんも驚きを隠せませんのことよ?」

「気にするな。お前は良くも悪くも徹底的にやる人間だからな、問題ない」

「マジで!?!」

「マジで。そしてそれで思い出したが、そろそろ生徒会室に戻るぞ」

言いながら、御剣がハヤブサの制服の襟首を掴む。

そこでようやく「しまった!」と自分が逃亡中だったのを思い出したハヤブサだったが、捕獲されてしまった以上逃げる手立ては無い。

「ちいつ! 話に夢中にさせてから捕獲しにくるとは!! 汚いな! さすが副会長汚い!!」

「誰が黄金の鉄の塊か」

「まあまあ、ヴェヌーシア君もそんなに抵抗しないでください。ヤマト君がいつも通りかなり怒ってますから、先に生徒会室に戻って仕事をしていきましょう。」

そうすれば、ヤマト君も見逃してくれる可能性はあるでしょう?」

「む……絶対にありえない筈なのに、会長に言われると何故かありそうだと思ってしまう不思議」

「それじゃあ、帰って仕事を片付けてしましましょう」

言葉こそ穏やかだが、そう言った後の朔也と御剣の行動は早かった。

あつという間に御剣と共に彼の両腕を掴んでハヤブサを引きずっていきけるような体勢になると、2人は揃って事の成り行きを見守っていたソフィアを美卯のほうを見る。

そして、2人とも微笑を浮かべてソフィア達に挨拶をした。

「それでは山城さん、ジュリーストンさん、気をつけて帰ってくださいね」

「宿舍までの距離は近いが、この時期は変質者も出るという話も聞く。十分に注意しろ」

「はい。つきー先輩もみっちー先輩も、頑張ってくださいね」

「月城先輩、御剣先輩、頑張ってください」

御剣達の挨拶に笑顔で手を振り、ソフィアと美卯は宿舍に向けて歩き出す。

少女達の背中が見えなくなったところで、朔也と御剣は、ハヤブサを引きずりながら生徒会室に向けてゆっくりと歩き出した。

「ちくしょう、今日こそはうやむやの内に逃げられると思ったのに」

「逃げようとするな。まったく、お前はやれば出来るのに何故仕事をしないのか……」

「そこにゲームがあるから、ですかね」（どやぁ……）

「……………朔也。今度生徒会の予算で胃薬を買ってくれ、ダースで」

「検討しておきます。ヴェヌーシア君も、あまり御剣君に苦勞をかけないようにしてくださいね？」

「前向きに検討したいと秘書が申しました」

頭を抱える御剣と、困ったなあと苦笑する朔也。
第4陸士訓練校で名物となっている、そんなやり取りの一幕であった。

「あ、ハヤブサ見つけた」

「あ、ヴェヌーシアさん見つかった」

「見敵必殺」

「わーお、殺意ビンビンすぎて泣きそー」

「……………朔也。5ダースに増やしておいてくれ」

「了解しました」

この後、訓練校の敷地内でガチバトルを繰り広げるハヤブサとりヨウガ、そしてそれを全力で止める御剣と朔也の姿があったという。そしてこのガチバトルは、最終的に高町なのは教官が割って入るまで続いたらしい。

第4 陸士訓練校。

ここでは日夜厳しい訓練と、一流大学も真つ青な座学を教えている。

もちろんそこに在籍している生徒達は、その全員が自分に厳しい人間達だ。

これは、そんな第4 陸士訓練学校の厳しくも楽しい日常を描いた物語になる予定だったナニカだ。

・今日のおまけ

『ハヤブサと御剣』

ハ「副会長、俺思っんですけど」

御「何だ？」

ハ「リトバスは人生。そして俺の人生の主役は俺。

つまり、リトバスは俺と言っても過言じゃ無いんじゃない

御「消し飛ばすぞ」

『リヨウガと朔也』

朔「ねえ、ヤマト君？」

リ「どうしたの、朔也さん？」

朔「高町教官の砲撃って凄いですよね」

リ「思い出させないで」

『ソフィアと美卯』

美「じー……」

ソ「？ どしたの、美卯」(どたぶーん)

美「……」(ぽよん)

ソ「変な美卯」

美「大丈夫、まだ成長期。これからこれから……」

第3話 『生徒会役員共と、巻き込まれた少女達』（後書き）

正直に言おう。ロム兄さんがやりたかったただけだ。
どうも、ラモンです。

そんなこんなで第3話。

今回は生徒会メンバー全員と、出せていなかったハヤト達のクラスメートの女子2人に出演していただきました。

御剣さんを大分はっちゃけさせたが、大丈夫だろうか？

怒られたら即行で書き直そう……（汗）

応募して頂いた作者の皆さん、何か自分のキャラでご不満な点などございましたら、メッセージなどで教えてください。

場合によっては最初から書き直しといたしますので。

それと、ここでちょっとお知らせ。

今回で3馬鹿枠、クラスメート枠、クラス委員枠、生徒会枠での出演メンバーは全員登場させることができました。

なので、ここら辺でこの枠のメンバー紹介を載せようと思います。

名前、年齢、髪型、外見、性格の5項目を載せたいと考えています。

さて、次回は残っている上級生枠、教員枠の皆さんに出演していただきたいところですが……教官枠全員登場はちょっと難しいかもです
すねえ。

流石に、教官が一気に登場となると、職員室の話になっちゃいそうですし。

あ、ちなみに教官としてなのはも出てきますので、そのあたりもよければお楽しみに。

それではまた、次の話で。

自分のキャラの扱いに納得いかない場合、すぐにメッセージなどでお知らせくださいませ。出来る限り修正します。

第3話までの登場キャラクター紹介（前書き）

今回は

- ・【3馬鹿枠】
- ・【クラスメイト枠】
- ・【クラス委員枠】
- ・【生徒会枠】

以上の4枠のキャラクターを紹介します。

第3話までの登場キャラクター紹介

・【3馬鹿枠】

【男子】

1.

名前：ハヤト＝ロックウエル

年齢：16

髪型：ボサボサの短い金髪

外見：目は緑っぽい青。ややツリ目がち

性格：楽天家。巨乳マニア。そしてエロい

備考：3馬鹿の馬鹿担当。御剣の胃薬摂取量を増やす原因その1。

成績は下の中

2.

名前：ルーク＝リーゼンベルグ

【F20Cさん著：魔法少女リリカルなのはStrikerS Lost Memory 他】

年齢：16

髪型：金髪の天然パーマ。長すぎず短すぎず

外見：紅色の瞳。身長は3馬鹿で一番高い

性格：エロ魔人。気さくな性格。だがエロい

備考：3馬鹿のエロ担当。御剣の胃薬摂取量を増やす原因その2。

成績は中の下と上の下とムラがある

3.

名前：リオス＝コーネルド

【神崎はやてさん著：魔法少女リリカルなのはStrikers
氷翼の天使】 他】

年齢：16

髪型：プラチナブロンドの短髪

外見：女の子と見紛うくらいに可愛い。金色の丸っぽい目。

身長は3馬鹿で一番低い。

性格：優しく誠実。苦勞人

備考：3馬鹿の理性担当。最近胃薬を飲むようになった。成績は上の中

・【クラスメイト枠】

【男子】

4.

名前：アルトリア＝ムーンライト

【キャビア伯爵さん著：魔法少女リリカルなのは 新約・純白の騎士姫】

年齢：15

髪型：金髪のポニーテール。長さは首の辺りまで

外見：リオスに負けず劣らず可愛い。緑色のたれ目

性格：そうそう怒らないが、涙もろい。そして総受け
備考：男の娘担当。弄る側、弄られる側どちらもこなす器用な少年。
成績はかなり良い

5.

名前：アウル・アパレシオン

【EXAMさん著：魔法少女リリカルなのはStrikers 亡霊の弾丸】

年齢：16

髪型：白色のミドルロング。首の辺りでひとつに纏めている

外見：黒く中性的な瞳。身長はルークと同じくらい。イケメン

性格：大人っぽく、面倒見が良い

備考：クラスのお兄さん担当で良心担当。成績はトップ10以内

6.

名前：ユウキ・エレンリッド

【結城光さん著：魔法少女リリカルなのはStrikers 運命を背負いし者】

年齢：16

髪型：茶髪で肩まで伸ばしている

外見：青緑色の瞳、身長はハヤトと同程度

性格：底抜けに明るいムードメーカー。しかしエロい

備考：クラスのムードメーカー。ハヤトやルークと一緒によく馬鹿をやっている。

御剣の胃薬摂取量を増やす原因その3。成績は中くらい

【女子】

7 .

名前：高町ゆず

【あーちゃん後輩さん著：W I S H 王女が願う夢】

年齢：16

髪型：黒のセミロング。肩のあたりまで

外見：切れ長な右がオレンジ、左が紫のオッドアイ。身長は低め。

胸は大

性格：のんびり屋で落ち着いている。悪く言うとお婆ちゃんっぽい
備考：お婆ちゃん扱いされるとイジける。基本はツツコミ担当。成績は中〜上

8 .

名前：草薙くさなぎ 蒼そう

【Kの2乗さん著：魔法少女リリカルなのはStrikers〜紅闇の少年と機人の少女〜】

年齢：15

髪型：藍色（濃いめの青）の、腰まで届くストレート

外見：水色の細い瞳。身長はゆずと同じ位。胸は貧

性格：人をからかうのが好き。ブラコン

備考：主に意地悪担当。胸の事をからかわれるとキレて凄いことに。
成績は中

9 .

名前：山城 美卯^{やましろ みう}

【検体番号10032さん著：告白 -アフターストーリー-】

年齢：16

髪型：こげ茶色の肩まで届くポニーテール

外見：明るい茶色のたれ目。身長はゆず、蒼と同じ程度。胸は小

性格：基本は面倒臭がりだが、根は真面目

備考：主にツツコミ担当。面倒見が良く、よく友人に相談を受ける。
成績は中くらい

10.

名前：ミコト「タツナミ

【ムーギネーターさん著：【習作】魔法少女リリカルなのはStr
ickers 〈禁断の刃〉】

年齢：15

髪型：肩にかかる程度のショートカット。茶髪

外見：やや釣り目がちの黒い瞳。身長はやや高め。胸は小

性格：負けず嫌い。ツンデレ

備考：主にツツコミ、ツンデレ担当。胸の大きさでからかわれると
キレル。成績は良い

・【クラス委員枠】

【男子】

11.

名前：氷上京谷 ひかみ きょうや

【Kyoさん著：魔法少女リリカルなのはStrikers】最強の魔導師は転生者】

年齢：16

髪型：茶色の短髪

外見：大きめの金色の瞳。身長はハヤトと同じ程度

性格：面倒見が良く、ツツコミ気質

備考：苦勞人。主にハヤトとルークのせいで氣苦勞が絶えない。成績はトップクラス

【女子】

12・

名前：ソフィア・ジュリーストン

【神崎はやてさん著：新魔法戦記リリカルAngels】The Rule of Gods】

年齢：14

髪型：深緑色のポニーテール

外見：オレンジ色の瞳で垂れ目。身長はクラスで一番低い。胸は巨

性格：天真爛漫で無邪氣

備考：クラスの癒し担当。クラス最年少で、皆から可愛がられている。成績は中の上

・【生徒会枠】

【男子】

13・

名前：月城 朔也 つきしろ さくや

【雨凧 雪人さん著：魔法少女リリカルなのはStrikersとある年増の銃騎士】

年齢：19

髪型：黒のミディアム、首の辺りくらいまで

外見：黒い瞳で垂れ目がち。身長はやや高めでイケメン

性格：温厚で年下に甘い。やや天然気味

備考：生徒会長。仕事も出来て訓練生に絶大な人気を誇る……が、時々天然ボケな行動をしてしまう時も

14・

名前：御剣 仁 みつるぎ ひとし

【Hagallazさん著：とある最強系主人公達の放蕩記】

年齢：19

髪型：黒色で、肩甲骨あたりまでのロングヘア

外見：ツリ目な黒の瞳。銀縁の眼鏡をかけている。身長は高くイケメン

性格：悪に義憤し善を嗤うタイプ。保護者属性。ツッコミ

備考：生徒会副会長。仕事も出来るし人気もあるが、もの凄い苦勞人で最近では胃薬がお友達。

生徒会の中では一番苦勞している人。

15・

名前：リヨウガ「ヤマト」

【十五郎さん著：魔王少年リリカルリょうが 他】

年齢：10

髪型：黒のショートで、前髪を分けて目に入らないようにしている
外見：垂れ目気味の青緑色の瞳。身長は年相応に低く、ゆず達よりも低い

性格：優等生を演じているが、腹黒。むっつりだったりもする

備考：生徒会会計。飛び級で訓練校最上級生になった天才。基本的にいい子だが、実は腹黒。

彼の本性を知っているのは極一握りの人間だけ。

16・

名前：ハヤブサ「ヴェヌーシア」

【タケケさん著：魔法戦記リリカルなのは「逆心を抱く戦闘機人」】

年齢：17

髪型：赤色でウニ頭

外見：藍色でやや釣り目がち。身長は中くらい

性格：やや面倒臭がりだが、人のピンチは放っておけない

備考：生徒会書記。ハヤトやルーク達と仲が良く、よく一緒にゲームをやっている。

御剣の胃薬摂取量が増える原因その4

第3話までの登場キャラクター紹介（後書き）

とりあえず、簡単なプロフィール紹介をやってみました。
どうも、ラモンです。

年齢などは、もちろん訓練校の話ですので原作どおりではなく、ある程度若返ったり年を取ってもらったりしました。

魔力ランクなども一応決まっていますが、多分殆ど関係ないので載せておりません。

うーん、やっぱりコレだけ人数が多いと、流石に被っちゃう部分がありますねえ。画像などがあればいいんですが……（汗）

まあ、細かいところは本編中で書き表せるように頑張ります。

一応作者の皆様の名前と作品名を載せておきましたので、詳しいプロフィールなどが見たい場合は、原作の方で確認していただければ幸いです。

それと作者の皆さんへ。

このプロフィールなどで訂正して欲しい部分がありましたら、感想やメッセージで訂正箇所を教えてください。すぐに訂正致します。

ではでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5850x/>

陸士訓練学校のドタバタな日常

2011年11月4日09時46分発行